

20～21世紀における戦争の変遷

— ヒロシマ、アウシュビッツの傷跡 —

Overview

- 20世紀の世界戦争の傷跡
- ポスト冷戦時代の紛争
- テロ——多様化した聖戦

20世紀の世界戦争の傷跡



ポスト冷戦時代の紛争

国家（群）の間の利害・
イデオロギーの衝突を原
因とする戦争

民族・宗教・文化の衝突
が関与する戦争

- 現代世界における紛争・戦争を説明するための概念的枠組み
- 文明の衝突 (S. ハンチントン)
- 世俗主義と原理主義の対決

テロ——多様化した聖戦

かつてのテロは政治犯の解放など政治目的のものが多かった（航空機のハイジャックなど）。米ソの冷戦の終焉（1989年）にともなって共通の世界観も失われていった。その過程の中で、テロの目的や手段も多様化していく。

テロの種類

- 宗教と関係のあるテロ
- ユダヤ教過激派によるテロ（1994年、ヘブロン虐殺事件など）、イスラーム過激派によるテロ、カルト宗教によるテロ（1995年、オウム真理教地下鉄サリン事件）、アメリカにおける反中絶テロ（1990年代）
- 宗教と関係のないテロ（アンチモダン・テロ）
- 環境テロ、動物テロ

「9.11」以降の「テロに対する戦い」

- アフガン空爆（2001年、タリバーン勢力の打倒）
- イラク戦争（2003年、サダム・フセイン体制の打倒）
- その後

【参考文献】

- ヴィクトール・E・フランクル『夜と霧』（池田香代子訳）みすず書房、2002年。
- 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』岩波書店、1965年。
- 小原好隆「小さな島の大きな悲劇」、竹内良男編『凍りついた夏の記憶——ヒロシマ・50年目の証言』雲母書房、1995年（添付資料）。
- 米山リサ『暴力・戦争・リドレス——多文化主義のポリティクス』岩波書店、2003年。特に第3章「記憶と歴史をめぐる争い——スミソニアン原爆展と文化戦争」。
- こうの史代『夕凧の街 桜の国』双葉社、2004年（マンガ、2007年映画化）。

- サミュエル・ハンチントン『文明の衝突』集英社、1998年。
- マーク・ユルゲンスマイヤー『ナショナリズムの世俗性と宗教性』（阿部美哉訳）玉川大学出版部、1995年。
- ——『グローバル時代の宗教とテロリズム』（古賀林幸・櫻井元雄訳）明石書店、2003年。
- ジョセフ・S・ナイ『国際紛争——理論と歴史』（田中明彦、村田晃嗣訳）有斐閣、2002年。
- 加藤朗『テロ——現代暴力論』中央公論新社、2002年。
- チャールズ・タンゼンド『テロリズム』（宮坂直史訳・解説）岩波書店、2003年。

戦争はどつして起るの？

回答者 エリ・ウーゼル（ノーベル平和賞受賞者）



本当に戦争はどつして起るののでしょうか？

なぜ人間はすばらしい生活を送るのをやめて、おたがいに殺しあったりするのでしょうか？ 相手のことがうらやましくなると、邪魔したくなるから？ 相手のことが大嫌いだから？

世界はもつとすばらしくなれるのに、なぜ世の中にはこんなに多くの憎しみ

があるのでしょうか？ きみはテレビに映った戦争の場面を覚えていますか？
そこで起こったことは、どこでも起こることでしょうか？ たとえば日本や
ドイツでも？

わたしはまだ子どもだった一九四五年に、「戦争はもう二度と起こらない」と確信していました。「人間はもうふたたびあのように残酷なこと、あのよう
にひどいことは体験しないだろう」と思っていました。でも、それはまちがいで
でした。世界は戦争という失敗からあまり多くを学ばなかったのです。

きみの親に向かって、「新聞に書かれていることを話して！」と言ってみて
ください。ヨーロッパのアイランドという国では平和条約を何度結んでも
不信と怒りが治まらないので、「別々の方法でキリストを信じている二つのグ
ループ」が対立したままです。また南アメリカのコロンビアでもまだ血が流れ
ているし、アフリカのコンゴでは、権力と地下資源を奪いあって、六カ国以
上を巻きこむ残酷な戦争が激しくおこなわれています。

きみはきつと次のような質問をするでしょう。「どつしてそういうことが起
きるんですか？ 戦争をやることにどんな意味があるんですか？ どつして人

間はもういいかげん、戦うことをやめようとしなさいのですか？」

今からわたしは、人間がどんなふうにして「悪いこと」を「いいこと」だと他人に思いこませるか、その方法についてお話ししましょう。その例として宗教を取りあげてみます。きみは「宗教は人間同士を仲良くさせるためにある。なぜなら、みんながひとりの神様のことを信じているから」と考えているかもしれませんが。でも、残念なことにきみがすっかりさせないわけにいかないのです。

宗教には、人間を対立させ、血に飢えたモンスターにしてしまう力があるのです。この本の「政治って何？」という質問のところ、このことについて、わたしの友人シモン・ペレスの文章をたくさん読みましたね。実際、宗教のために何千万という人たちが殺しあいをした時代もあったのです。

とすると、宗教はいつもわたしたちに不幸をもたらすのでしょうか？ いえ、必ずしもそうではありません。人は宗教をひたすら信じるだけでなく、「神様のところに通じている道はいくつもある」ということをいつも考えていなければなりません。

神様はあらゆる言葉を理解なさっています。神様はあらゆる祈りの言葉をお聞きになっていらっしやいます。聖地メッカに行くイスラム教徒の言葉も、ローマに行くキリスト教徒の言葉も、そしてエルサレムに行くユダヤ教徒の言葉もお聞きになっているのです。宗教を信じている人たちは、別の宗教を信じている人たちもいることを認める必要があるのです。そうなれば、すべてがうまくいくのです。

「愛国心」という言葉を聞いたことがありますか？ 自分の国を愛する心のことです。ところが多くの戦争では、この愛国心が戦争の原因になりました。何千万人という人たちが、自分の国を守るために殺されました。

そういう人たちはまちがっていたのでしょうか？ いいえ、そんなことはありません。自分の民族、国、家族を愛するのはよいことです。ほめられていいことです。攻めてきた敵と戦い、侵入してきた軍隊に抵抗することは、すべての人の義務です。

でも宗教の場合と同じように、自分の国や民族のことを極端に大事に思う人が出てくる危険性もあります。そうすると、美しい気持ちもゆがんで

まいます。いつも悪いことがおこなわれたり、人が殺されてしまうことになるのです。

そんなに極端にならない方法はないのでしょうか？ みんながおだやかになる日は来ないのでしょいか？ 必ず来ると、わたしは思います。

現在のヨーロッパを見てごらんさない！ 今まで何千年も対立してきたいろいろな民族が、今は共通の未来を築こうとしています。ドイツとフランスはもう二度と、国境地帯の土地を取りあう戦争をしないでしょう。国境は基本的にもうなくなつたのです。パスポートがなくてもひとつの国から別の国へ旅行できるよになつたのです。こうした国々は今から数十年前にはまだ、おたがいに戦つていました。それが今は仲良くなつているのです。

戦争の原因としてはほかに憎しみがあります。憎しみを抑えるためには、そして憎しみをなくすためには、どうしたらいいでしょうか？

まず憎しみという仮面をはぎ取つて、その後ろに何が隠れているかを見つけないことです。それが第一歩です。そのほかのことはすべて自然にうまくいきます。いつの日か人は、憎しみが敵だけでなく自分自身をも破壊してしまうこと

を理解するようになるでしょう。憎しみは結局いつも自分を破壊してしまふのです。

憎しみよりもさらにたちの悪いことがあります。それは、制服を着た殺人犯が、きみのような子どもやきみの親のような大人たちを「憎しみを感ぜないで殺してしまふ場合」で、そうなると本当にひどいことになります。

わたしはそうした殺人者を何人か知っています。彼らは相手が憎くて殺したことは一度もありませんでした。彼らにとつて、わたしたちは人間ではなかつたのです。わたしたちは憎むにも値しなかつたのです。これは本当に憎しみよりもたちの悪いことです。

きみは若いのです。学校に通い、本を読み、映画を見ます。きっと友だちもいて、いっしょにいろいろなことを話したり、何か計画を立てたりするでしょう。きみたちはどんな夢を持っていますか？

きみたちの夢のなかに「戦場での勝利」が入っていないことを、わたしは望みます。本当の名誉は戦場では得ることはできません。これは本当です。戦争はいろいろな目的でおこなわれますが、そのなかで絶対にまちがっている



エリ・ワイゼル

一九二八年九月三〇日生まれ。子ども時代にホロコースト（ドイツのナチ政権によるユダヤ人の大虐殺）を生き延びる。平和と人間の尊厳に対する貢献により、一九八六年にノーベル平和賞を受賞。現在ニューヨーク在住。ポストン大学教授。



ことがひとつあります。それは名誉です。戦争が始まれば、体がバラバラにされたり、みんなが不安になったり、物を乞をしたりするようになります。子どもたちのなかには、親や親類を失う子もいます。戦争は悲しみです。戦争は破壊です。絶望であり、死なのです。

「それじゃどうして本やテレビや映画で、戦争のことをすばらしいと言っている人がいるんですか？」と、きみは質問するでしょう。たしかにそう言っている人間はいますが、これからはもうそんなことを言うべきではありません。二世紀には平和を大事にしなければなりません。人間同士が仲良くする必要があるので。平和がもたらす幸福を味わう必要があるのです。

最後にひとつのお話をしたいと思います。聖書に出てくる最初の戦争の話です。カインとアベルの話ですが、きみは知っていますか？ 二人は兄弟ですが、カインは弟のアベルを殺してしまうのです。聖書はなぜこんな恐ろしい話をのせているのでしょうか？

わたしはこの話を読んで、兄弟でも敵になることがあることを知りました。人を殺す人間は自分の兄弟も殺すのです。

に、患者の人たちの願いを叶えてあげることのできないことは、私にとってもつらく苦しい毎日であった。

全身を火傷し、両方の手の半分が骨の見えるほどの負傷をしている男の人が、私の足をつかみ、「兵隊さん、水を下さい」と言った。この人ももう助からないと思いつつ、その時の私は水を与えることができなかった。だが、死は間近であることを思い起こし、「後で持ってくるから」と言ってその場を離れようとした時、なんと、私の足にこの人の手の皮と肉が付いてしまったのである。死を目の前にした人が、私の足に血と肉がくっつくほどに必死の力ではがみつき、水を欲しがったその気持ちを思うと私は、戦争の悲惨さを改めて思う。この男の人も、私が最後の水を持っていったときには、すでに死亡してしまっていた。

助けることができなかった、何もしてあげることができなかった、という悔恨の思いが私にはとてもつらい。

六日七日、八日と死亡者が続き、それから後は少し減った。

手術した患者たちの繃帯交換も多少できるようになって、繃帯を取り除くと、悪臭と共に、蛆がどっさりと思つ白い固まりとなって、ポロポロと落ちてくる。繃帯の交換といっても、次に新しい繃帯を準備するわけではないのである。そんな新しい包帯などもないのであるから、また洗って使うことになる。

傷口を覆わないでほおっておくと、蛆がまたわいてくる。生きた人間の体を、蛆は、遠慮なく

喰う。人間は死ぬるのに、蛆は死なないのかと、その時は、本当に恨めしく思ったものである。

針金で傷ついた手を、首から吊っていた兵隊もいた。次第に針金が腕に食い込み、本当に痛々しい状態になってしまったので、毛布を切り裂き、針金と交換したこともあった。この兵隊は、それでもとても楽になった、と喜んでいた。

顔かたちも分からないほどに火傷がひどい母親が、病室の隅に座り、南瓜のように大きくふくれあがった頭の子どもを、抱いてあやしなから「水おくれー」と叫んでいた。ところがその母親が抱いている子どもはすでに死んでしまつて冷たくなつていたのである。死んだ子どもを離そうともせず、彼女は叫び続けていた。恐怖のためであろうか、高熱によるものなのか、精神に異常をきたした人はかなり目立っていた。

その一方で、外見は全く無傷で、他人の世話をしていた元気な人が、突然、全身に多数の血の斑点が出たかと思うと、口内出血し、あるいは吐血し、倒れてそのまま亡くなつてしまうこともあった。

いづれにしても、われわれは当時、まだ放射能のことなど全く知らずに処置の方法がなかったのである。

たくさんの人たちが、肉親を捜して毎日島を訪れていた。

親たちが探しに来るのを待ちながら、親に会うこともできないまま多くの子どもたちが死んでいった。ある子どもたちは小さな声で「君が代」を歌いながら、そしてまた一方で「私たち、な

せ死ぬるの？ 私たちは、何も悪いこととしていない」という、悲痛でいたましい叫び声をあげながら息を引き取っていった子どもたち……。そう、たしかに君たち子どもは、本当に何もしてないのだ。戦争中の不自由さとひもじさと苦しみだけの毎日のあとに、こうして苦しんで死んでいかねばならないというのは、いったいどういうことなのか？ 私は死んでいく子どもたちがただただ哀れで、何とも言葉がなかった。

この子どもたちを死なせたのは、われわれ大人の責任である。戦争を止めることも、また戦争を防ぐこともできなかったのは、大人たちの責任なのだ。死ぬ間際まで、「君が代」を歌い

ながら死んでいった子どもたちを作ってきた教育の責任も、われわれ大人にある。

いま私は、戦争の恐怖と無意味さとを、若い人たちにはつきり具体的に知ってほしいと思う。それが、戦争体験を継承するということの本当の意味だという気がする。

